

武蔵野日曜集会

バプテスマ

――ローマ書第6章――

1978年4月23日(武蔵野)

小池辰雄

水に浸す サクラメント 罪のうちに止まるべきか ドラマチックな構造 キリストの中へと
バプテスマ 十字架のバプテスマ また彼とともに活きん キリストに在りて活きたる者 信
即現 永遠の生命は既に来ている 聖霊のバプテスマ

【ロマ6】

1 されば何をか言わん、恩恵^{めぐみ}の増さんがために罪のうちに止まるべきか、
2 決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争^{いか}で尚^{なお}その中に生きんや。3 なん
じら知らぬか、凡^{およ}そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、
その死に合うバプテスマを受けしを。4 我らはバプテスマによりて彼とともに
に葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中
より甦^{よみがえ}えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。5 我
らキリストに接がれて、その死^さの状^{さま}にひとしくば、その復活にも等しかるべし。
6 我らは知る、われらの旧^{ふる}き人、キリストと共に十字架につけられたるは、
罪の体^{からだ}ほろびて、此ののち罪に事^{つか}えざらん為なるを。8 我等もしキリストと
共に死にしなければ、また彼とともに活きんことを信ず。9 キリスト死人の中
より甦^{また}えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10 そ
の死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につ
きて活き給えるなり。11 斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、
神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思ふべし。12 然れば
罪を汝らの死ぬべき体に王たらしめて其の慾^{よく}に従うことなく、13 汝らの肢体
を罪に献^さげて不義の器となさず、反つて死人の中より活き返りたる者のごと
く己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献^さげよ。14 汝らは律法の下
にあらずして恩恵の下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。15 然らば
如何に、我らは律法^{おきて}の下にあらず、恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、
決して然らず。16 なんじら知らぬか、己を献^さげて僕となりて、誰に従うとも
其の僕たることを。或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて義
にいたる。



17 然れど神に感謝す、汝等のもと罪の僕なりしが、伝えられし教の範に心より従い、18 罪より解放されて義の僕となりたり。19 斯く人の事をかりて言うは、汝らの肉よわき故なり。なんじら旧その肢体をささげ、穢と不法との僕となりて不法に到りしごとく、今その肢体をささげ、義の僕となりて潔に到れ。20 なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。21 その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極は死なり。22 然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる実を得たり、その極は永遠の生命なり。23 それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

●水に浸す

「バプテスマ」という言葉は、「バプティズム」という「水に浸す」という字です。これはもともと潔めのためにやる。ユダヤ教においても――その他の密教においても、またこちらの方の神道においても――東西の宗教で、潔めということは自ずから共通した面がある。穢れからの潔めです。大体、最初は穢れからの潔めということが多い。「罪」という意識はそれほど強くない。それから、罪の潔めということになってきますけれども、旧約聖書では、特にレビ記の15章にその潔めのことが書いてあります。水で潔める。それから、民数紀略19章にも出てきます。民数紀略の方になると、少し罪の觀念が入っている。それから著しい例に、列王記略下の5章におもしろいことが書いてあります。

シリア王の軍勢の長ナアマンという将軍が癩病を患う。しかし、彼はエホバの神さまに對する信仰を持っているものだから、8節のところに、

「ここに神の人エリシヤ、イスラエルの王がその衣を裂きたることをきき、王に言い遣わしけるは、汝何とて汝の衣をさきしや。彼をわがもとにいたらしめよ。然らば彼イスラエルに預言者のあることを知るにいたるべし。」

と。エリシヤはご承知の通り、エリヤの衣鉢を継いだ非常に靈的な預言者ですが、これは列王記略上の終りから下の初めの方に出ています。

10 エリシヤ使をこれに遣わして言う、汝ゆきて身をヨルダンに七たび洗え、然らば汝の肉本にかえて汝は清くなるべしと。

エリシヤはちゃんと預言して、そういうことを言っている。身をヨルダンに七度洗えと。という数はよく出てきます、「三」とか「七」というのは。実際そのようにやった。そうしたら、治ってしまった。

14 ここにおいてナアマン下りゆきて神の人の言のごとくに七たびヨルダンに身を洗いにその肉本にかえり嬰兒の肉の如くなりて清くなりぬ」(列王記略下5:8～14)



癩病が、ヨルダンでもって七度身を浸したら、清くなってしまった。これはエリシヤの祈りがかかっているからです。ただ、まじわぎ式なことを、おまじないみたいなことを考えてはいかん。そういうような、身の穢れや病からの潔め、癒しなんていうことが旧約に出ている。しかし、それが預言者のところに行きますと、イザヤ書1章16節、

「¹⁶なんじら己をあらひ己をきよくし、わが眼前よりその悪業をさり、悪をおこなうことを止め、¹⁷善をおこなうことをならい、公平をもとめ、虐げらるる者をたすけ、^{みなし}孤子に公平をおこない、^{やもめ うったえ}寡婦の訟をあげつらえ」(イザヤ1:16-17)

預言者になると、宗教はハッキリ、縦の関係から来るところの、信仰から来るところの倫理的な内容になってくる。でも、「己を洗い己をきよくし」というようなことが書いてありますね。イザヤ書でも「己を洗い己をきよくし」ということが同時に、水に浸すことが、その気持ちは、本当に心を洗うこと。預言者になると、体を水につけることは同時に心を清くするという、道徳的な問題に強く深く入ってくるわけです。だから、罪からの清めとということになる。

エレミヤ記の4章14節に、

「¹⁴エルサレムよ汝の心の悪をあらひ潔めよ、然らばすくわれん。汝の悪き念いつまで汝のうちにあるや。」(エレミヤ4:14)

とある。「心の悪を洗い潔めよ」とあるでしょ。こうなるともうハッキリ、ただ水で洗うのではなくて、水で洗うということを霊的な内容として言っているわけです。「心の悪を水でもって洗え」と、そんなように言っているわけではないです、こういう言葉になると。

「頭の中から爪先まで罪に穢れてどうにもならん」

ということは、イザヤ書の初めの方に書いてあったね。1章6節、

「⁶足のうらより頭にいたるまで全きところなく、ただ創痕と打傷と腫物とのみなり。而してこれを合すものなく包むものなく亦あぶらにて軟らぐる者なし。」(イザヤ1:6)

「どうにもならんよ、お前たちの罪は」ということも言っている。

●サクラメント

話はちよつとズレますけれども、「サクラメント」という言葉を聞いているでしょ。これはもともとラテン語で、この言葉は聖書にはない。サクラメントは「聖礼典」とプロテスタントでは訳している。カトリックでは「秘蹟」と訳している。カトリックにはサクラメントが七つある。プロテスタントは、ルターはその五つをやめて、二つにしてみました。即ち、「洗礼」と「聖餐」です。聖餐というのは最後の晩餐から来ている。



この二つだけは、私はハンブルクでルター教会に行ったら、やってましたよ。私は一応、聖餐にもあずかった。「サクラメント」というのはもともと軍隊用語です。その軍に忠誠を誓う、服従することをいう。そういう服従ということからして、教会に対して忠誠を誓う教会員であるということ。それは、もう一つの霊的な内容からいうと、教会というのはキリストの体であり、キリストの体にあずかる、それに連なるというようなわけで、サクラメントを、即ち洗礼と聖餐を受けるといことなんです。洗礼の方が土台です。それから聖餐です。これは血と肉に与かる。キリストの体に連なるんですから、キリストの体となるようなところだね、こつちの方は。

それが洗礼と聖餐で、これは大事なことで、アウグスティヌスがこのサクラメントのことを

「内的な見えざる恩恵の見える徴だ」

と言いました。見えざる恩恵が神さまの言、聖書——神の言は見えざる恩恵の内容ですが——その見える徴である。それがサクラメントの本質、意味であると。これはアウグスティヌスが言った有名な言葉です。もう一つ簡単に言くと、

「見える神の言がサクラメントだ。洗礼は見える神の言である」

と、こういうわけです。それで、洗礼・聖餐の目的は何かというと、キリストに連なること、キリストに結びつくことである。連なるのも、それは共同体の一員として、即ちキリストの体たる教会の、エクレシアの、召団の一員としてこれに連なる。一人びとりがバラバラではない。

ただ教会では、非常に教会というものが今度は、ヘタすると形になってしまつて、それで、形式になるから、内村鑑三が「無教会」ということを言いだした。けれども、教会そのものは本当は見えざる形なんだ。教会そのものも見えざる形だ。見えざる形だけれども、具体的にはちゃんと連なっている人たちがいる。

「見える教会、見えない教会」というようなことをマルチン・ルターも言いました。しかし、ルターの言い方がちよつとうまくないので、ブルンナーがそこを訂正してます。具体的には、どんなに惨憺たる集まりであつても——人間の集まりは惨憺たるものだよ、罪びとの集まりだから——その惨憺たるものだけれども、具体的にあるんだから、それを「見えざる」と言つてはいかん。どこまでもそれは具体的に見える、具体的な人の集まりなんだ、教会というのは。それが全きというわけにはいかない。けれども、それが本当にキリストに連なる。罪びとを求めているキリストなんですから、全きものをキリストは求めてはしないんだ。罪びとを求めている。そのキリストに連なることによつて、信仰的現実としてキリストの者となる。どこまでも具体的である。

その「神の言」を受けるといこと——「神の言」というのは、聖書はもちろん神の言ですけれども、神の言の一番中心はキリスト自身が神の言です。だから、神の言、即ちキ



リストに連なるのは、神の御言を本当に身に体するということと、洗礼・聖餐という、こういった「見える言」としての具体的なものを受けとるということが、教会の在り方としてはあるわけなんです。それが本当なら、それでいいんですよ。けれども、とかくそれが形式になっってしまうから、「洗礼も聖餐も要らない」と、内村先生がやっているんだよ。けれども今度は、「要らない」と言つて、本当の洗礼を、本当の聖餐を、何も式でなくても、やっているかとなると、これが本当になっていない場合が非常にあるわけです。

では、何が一体それを本ものにするか、ということですよ。「バプテスマ」ということから、一応それだけのことを前提としてお話しておかないとね。

●罪のうちに止まるべきか

それでは今度は、本文に入ります。まあ、パウロが一つのことを繰り返して、くどく言っているわけです。

「されば何をか言わん、恩恵めぐみの増さんがために罪のうちに止まるべきか、

「罪の増すところに恩恵はいや増す」

ということが5章20節にあつたでしょ。この考えは即ち、親鸞と同じように、

「善人往生す、況いはんや悪人においてをや」

ということなんだ。善人が救われる。いよいよもつて悪人こそ救われるんだ。それが本願の本願たるどころだと。キリストの譬話たとえはなしの中にもある。

「多くを赦されたる者が多くを愛する」

というような言葉がある。「それでは、大いに悪いことをしようか」と、そういう論理にはならない。

十字架上の盗賊が二人いる。これは『無者キリスト』にも書きました。盗賊は悪いことをしたことにおいては同じなんだ。どちらも十字架にかかる資格があつた。キリストは資格がないんだ、十字架にかけられる資格は持っていない。右側の盗賊は、悪いことをしながら非常に傲慢である。左側は「俺は悪かつた」と、神を畏れている。

「なぜ、お前は悪いことをしたのに神を畏れないのか」

と言いました。左側は神を畏れた。右側は、

「お前が神の子なら、自分と俺たちを救ったらよからう」

なんて、キリストに向かって言っている。左側の盗賊は、

「我々は悪いことをして、十字架にかかるのは当然なのに、この人はちつとも悪いことをしてない。なぜ、お前はそんなことを言つて神を畏れないのか」

と言つて、キリストに、

「御国に入りたもうとき、せめても私を覚えてください」

と言つたら、キリストは、



「汝、今日我と共にパラダイスにあり」(ルカ23・43)

と言われた。同じ罪びとだけれども、片一方は砕けた。もう片一方は砕けない。これはサタンの心です。非常に罪が深いけれども、神さまの前に、キリストの前に平伏したので、砕けた方は真先に天界に往った。

「罪の多いところに恩恵は増した」

と。具体的にはそういうこともあります。救われてみると逆に今度は、罪の意識はまた深くなる。

「我は罪びとの首なり」^{かしら}

とパウロは言ったでしよ。私は悪人の最たる者だと。最大の人が、自分は「罪びとの首である」と言った。罪の意識の強いところには、逆に恩恵は強くなる。

しかし、取り違えてはいかんですよ。罪の意識を強くして、そうして「罪、罪、罪」と言つて、どうにもならなくなつてしまつたら、これはまたしょうがない。そういうものをすつ飛ばしてくださったのがキリストなんだから。ただ意識的にやっていることが決していいということではない――罪ということを、もはや、意識もできないほどに、もう問題を問題にすることもないほどに――罪をいくら意識しても始まらないということです。しかし、人間だから、相対的には躓いたり転んだりするから、申し訳けないというわけで進んで行くわけですよ。

●ドラマチックな構造

大事なのは、罪という暗黒を見るよりも、キリストという光を見ている方が大事なんです。いわゆる罪の暗さの深刻さをただ持っていたつて、それはダメだ。ちよつと、キルケゴールにはそういう癖がある。だけれども、もちろんこれをいい加減にしているのではない。

人間というのはいろいろ、人によつてその性格や資質から、とらえ方やなんかいろいろでいい。見てごらんよ、パウロとヨハネとペテロはみんな違うではないか。言い方が、また意識の仕方が。いいんです、違つたつて。みんな同じだったら、しょうがないよ、おもしろくない。みんな顔が違うように。「こういうように考えなくてはいけません」とか、「それは間違っています」とか、私はああいう妙な区別をする神学的な判断は嫌いです。あれは本当ではない。ヨハネはヨハネらしく、ペテロはペテロらしく、パウロはパウロらしくていい。問題は、どれであつても、

「本当に十字架を受けとっているか、本当に聖霊が来ているか」

と、それだけです。その受けとり方が、知的であろうと、感情的であろうと、意志的であろうと、どれだつていい。それをあんまりゴタゴタして、「あれはああ思うが、ああ言っているが」なんて、そういうことを言うものではない。

自分自身がドラマチックだし、人間の集まりそのものがドラマチックな構造です。しか



も、それは、本当の意味では、有機体的なんです。大自然を見たつてそうです。毛虫一匹も、これはその存在の理由がある。それを農薬や何かでやつつけてしまうから、逆に人間自身がまたおかしくなる。

チャップリンの映画(『殺人狂時代』)をいつか見てたら、毛虫をチャップリンは踏みそうになったとき、彼はハッとそれをやめて、毛虫をつかんでバラの中に入れてやった。ああいうところに、私はある不思議なものを感じた。シュバイツァーが

「生に対する畏敬」

ということを言った。生き物を殺してはいかん。そう言っても、毛虫の繁殖することを喜ぶわけではない(笑)。だから、何と言ったつて、現実というものは矛盾構造なんです、劇的な。「それでは、もう私たちは何も食えないということになってしまふ」なんて。しかし、生きづくりなんていうものはあまり感心しないね。まだ少し動いているようなものを食べて喜んでるのは。ああいうときは、「南無阿弥陀仏」をしなければダメだよ。「南無キリスト」して食べなければ。やむを得ざる悪がたくさんある。とにかく、問題はそれに対する心の在り方です。当然なんて思ったら大間違いだ。

●キリストの中へとバプテスマ

²決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争^いで尚その中に生きんや。

そういった罪はあるんです。けれども、それを乗り越えて、罪は在りながら、それに勝っているということはどうして可能かと。そんなところに止まっていいい気になっているわけには、もちろんいかん。それは事実が証明する。そんなところにいい気になっていれば、どうせ魂は死んでしまふ。行き詰まってしまう。そして、苦しい。魂の世界はごまかしがきかないから、いくら論理で、頭でもって整えたつてダメだよ。

6章を読んでいて、パウロの言葉は、私はちよつともの足りないことを感じているところがある。パウロという人はなかなか頭のいい人だから、とかくすると、ギリシヤ的な論理構造でものを言ったりする。コリント前書15章だつて、そういうところがある。

³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。

「合う」でも「あずかる」でも似たようなものです。これはギリシヤ語のそのままで言うと、「キリスト・イエスの中へとバプテスマ」ということ。

「およそキリスト・イエスの中にバプテスマされし我らは、これは受け身になっている、

キリストの中へと、彼の死の中へとバプテスマされたのである」
ということ。逆に言うと、

「バプテスマされてキリストの中へ入った」



と言ったっていい。死という状態の中に入れられてしまう。要するに、いつも私が言っている「中」の世界なんです。「連なる」とはそういう意味です。外側から連なっているのではない。だから、「中へ」と訳した方がいいではないですか、

「汝ら知らぬか、およそキリスト・イエスの中へとバプテスマされた我らは、その死の中へとバプテスマを受けた」と。

⁴ 我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。その死と一つにされた。

これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。

ここに「バプテスマ」という言葉をパウロは使っているんだけど、パウロはこのときに、洗礼・聖餐の「サクラメント」のような意味で、ただ言っているのではない。それは後から生じてきた。こういうことからして、サクラメントが出てきたわけで、サクラメントという制度があつてから、パウロはこんなことを言っているのではない。

洗礼のヨハネは悔改めの「浸礼」をヨルダンで施していた。

「今までの自分の在り方は間違っていました」

と、方向転換をする「悔改め」です。方向転換のために、古き我に死ぬ徴、それが浸礼です。その決意もいいけれども、また元へ戻ったりするよ。ところが、この方向転換の必要もないキリストが同じく浸礼を受けながら、悔改めと同時に、彼は聖霊のバプテスマを受けてしまった。そのことを洗礼のヨハネはちゃんと知っているから、

「あなたは私からバプテスマを受ける人ではない。あなたは霊をもつてバプテスマする人だ。私にはそれはできないけれども、あなたはそういう人だ」

と先を見ているわけです。キリストは同時に聖霊のバプテスマを受けてしまった。水から上がってきたら、聖霊が鴿の如く彼の上に臨み、

「汝はわが悦ぶ者なり、愛しむ子なり」

という声が上がってきた。

●十字架のバプテスマ

死が同時にキリストにとっては生。死生の転換を同時にキリストはやってしまった。パウロがここで言っているのは、何もこういう浸礼のことを言っているのではない。「浸礼」の言葉は使っているけれども、「バプテスマ」という言葉は使っているけれども、パウロが言っているのは十字架のことです。

「キリストと一緒に自分は十字架のバプテスマだ」

というのはおかしい話だけれども、血にあずかっている。水でなくて、これは血だ。贖罪



です。パウロがガラテヤ書2章20節で、

「²⁰我れキリストと偕に十字架せられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。」(ガラテヤ2・20)

「我れキリストと共に十字架せられたり。我れ生く、されどもはや我に非ず」

と。「我れ生く」というのは、その「生く」は聖霊のことです。聖霊に在って生きている。だから、もう自分ではない。「我に非ず」と。だけれども、生きているのは聖霊で生きているんだけど、古い我だって、そこにはいますよ。いますけれども、それはもう問題でなくなっているわけです。人間の構造なんてそんな割り切れるものではない。

キリストに在って、死へとバプテスマされてしまった。だから、パウロが後でもって、「生命へと、同じくキリストの生命にあずからざらんや」

なんてことを言っているわけです。彼と共に葬られてしまったんだから。ただ洗礼のことを言っているのではない。

⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦^{よみがえ}えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。

というんだから。パウロはそのところをもう一つ飛び越えて言ってしまったわけです。

「今度はキリストの復活の生命にあずかる」

というようにことをね。順序を立てて言っていない。飛躍してしまっています。その次に今度はまた書いてある。

⁵我らキリストに接がれて、その死の^{おと}状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。

「等しくば、等しかるべし」なんていう言い方を論理的にしているけれども、

「等しくなりましたので、今度は甦^{よみがえ}えりと等しくなっていますよ」

と、事実を言った方がいい。パウロの言葉を読んでいると、頭でみんな分かるんです。頭で分かっただけで、ヘタすると、お終いになってしまう。もう一つ奥を事実として読まなければダメです。

「私たちは十字架によって、キリストに接がれて、その死に等しくなりました。だから今度は、復活の生命によって、復活のキリストの甦^{よみがえ}えりと同じことになりました。」

と。「そうですか」ではない。ここでパウロは聖霊のことは一つも書いてない。聖霊のことを一つも書いてないけれども、これはどうしたって聖霊のことがなかったら、復活の生命なんて来やしない。別なところで、パウロは別な書簡で言ってますけれどもね。



●また彼とともに活きん

6 我らは知る、われらの旧き人^{ふる}、キリストと共に十字架につけられたるは、

もうハッキリ出ているね、十字架のことを言っているということが。即ち、生来の私たちはキリストと共に十字架されてしまったから、

罪の体^{からだ}ほろびて、此ののち罪に事^{つか}えざらん為なるを。

もうハッキリ、それは罪につかえてはいない。罪を主としてはいい。「罪の僕」という言葉が後から出てきます。「罪につかえざらんため」ということは、罪の僕ではなくって、「キリストの僕」になってしまった。

それを普通のクリスチャンはこれを読んで、それは頭で分かるんです。そして、その気になっている。そして、そのようにキリストの僕であるのは「信仰による」とやっているわけだ。「信仰」という切り札でやっているわけだ。ところが、この信仰が、とかく一般に「信仰、信仰」と言っているけれども、信仰がヘタすると躓きになる。御霊^{うけひ}を受^う霊^{けい}してなければ、ただ「信仰、信仰」と言っただけで、それは一向進行しないんだ。先へ進まない。どうしてもここに、パウロが聖霊のことを言っていないけれども――もうそういう現実からパウロは言っているから、いちいち言わないけれども――そこが読めなければダメですよ。

「甦^{よみがえ}りの生命に等しい」というのなら、なぜ私は甦^{よみがえ}りの生命に等しいでしょうか。ただキリストの甦^{よみがえ}りを信じて、等しいでしょうか。ちつとも等しくはない。それは観念だよ。キリストの甦^{よみがえ}りの生命に等しいためには、キリストの甦^{よみがえ}りの生命をして甦^{よみがえ}えらしめているところの内容は霊ですから、霊生ですから。受^う霊^{けい}は霊生の中に入るわけです。受^う霊^{けい}すると、霊生ということになる。霊に生きることになる。それが甦^{よみがえ}りの生命です。だから、これは

「霊生にも等しかるべし」

と書いたっていいんだ、「復活にも等しかるべし」なんて言うよりも。

われらの旧き人^{ふる}は十字架されて、もう本当にガラテヤ書2章20節みたいに十字架せられたから、もうすつ飛んでしまったから、相対的な自分がどうであれ、そんなことは問題ではない。

7 そは死にし者は罪より脱^{のが}るるなり。

もう罪が支配しなくなってしまうから。「旧き我」なんてものはいないんだから。居たって、居ないと同じことになってしまっている。ところが、時々、その罪の支配の中に入ってしまうから、具体的な人間は。「もう、私は大丈夫です」なんて、これはまた観念になるよ。それだったら、偽りになる。

8 我等もしキリストと共に死にしなければ、また彼とともに活きんことを信ず。

なんて、パウロは生まぬるいことを言っているから困る。「我等もしキリストと共に死にしなければ」なんてね、そういう言葉は仮定的な言い方をしているだけの話なんで、パウロは



なにも本当は仮定しているのではない。

「我らはキリストと共に死にましたので、また彼と共に生きております」

ということですよ。「活きんことを信ず」なんて言ったって、これは困るよ。どうぞ、そういうように読んでくださいよ。パウロの言葉通りに読んでしまうと、観念に抜けてしまうんだ。みんなそれをやっている。私がかつてそうだったからハッキリ言うんです、それではダメですよ。

「儀文は殺し、霊は活かす」

という。ただもう、「聖書にはこう書いてある」と言ってね——そういうのを「グラマリアン」と言うんだ——聖書の言葉に忠実にね。もう嫌になってしまいうよ、ああいうのは。その言葉の奥を読むことが、本当にその言葉に忠実なんです。パウロさんだって、いちいち「こう書く」と人が躓くだろうか」なんて考えて書いてやしないんだから。その時の勢いで書いてしまう。仮定的な書き方をしても、パウロは本当は仮定を言っているのではない。そこが読めなかったら、本当に読めないんです。だから、私たちは、「もし」なんて消してしまえ、そんなものは。

「我らはキリストと共に死にしゆえに、また彼と共に生きております。御霊が来ているから活きている」

と。あなた方ね、聖書を他の人が朗読しているときに、聖書を見たって悪くはないけれども、聖書は聴く本なんです。これは読むものではない。もともと、みんなこれは聴いているんだから。キリストから聴き、パウロから聴いている。仕方がないから、パウロは書いただけの話なんだ。聖書というのは、已むを得ざる本なんだ。あとで消えてしまうから。録音してあれば一番いいんだ、本当は。昔、録音してあったら、これは大変なものだね。だから、皆さんは、私の文字よりも録音の方をしつかり大事にしてくださいよね。

神さまから聴き、アブラハムもみんなこれは聴いている。それから、捕まえられたんです。

「つらつら目にて見、耳にて聴き、手にて触りし」

という具体的な世界です。

「私は空気を思っ生きています」と誰が言うか。空気を吸って生きているんだ。私はしょつちゅう、話の前に水を飲んでいいる。水はH₂Oであることをガラスの外から見、私は満足しましたなんて言っているんじゃない。飲んでいいる。空気もみなその通りです。だから、キリストの霊の中にあるから、我々の魂は生きている。魂の世界は絶対にごまかしがきかない。どんなに整えてものを言おうが、紙の上の答案が百点満点のようであつてもダメなんだ。一方は、聖書をよく勉強して、聖書について聞いたたら百点満点だ。片一方は一向にわからない。ヘタすると、聖句をつくつたりする。しかしながら、そっちの方が本当なんだ。キリストはとにかく、在るがままをぶちまけて来る者を、みんな捕まえたではないですか。そうでしょ。整ったパリサイ人なんていうのはキリストの敵なんだ。



●キリストに在りて活きたる者

⁹キリスト死人の中より甦^{また}えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。

その通り。

¹⁰その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。¹¹斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。

また、「思うべし」なんて言っている。「活きたる者と思うべし」ではないよ。

「生きています」

となぜパウロは書いてくれなかったか。「そうですか、思わなくてはいけませんか」なんて、こんな言葉に躓いてはいかんですよ。だから、私は「パウロはまだるっこい」ときつき言っただけです。

「神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者なり。お前たちはそうである」

と。私は、聖書の少し乱暴な訳をひとつ作ろうかな、本当に。「小池の聖書はひどいよ、あれは誤訳だらけで」なんて。「誤訳」ではない。根源訳だ。根訳だ。根つこの訳だ。聖書の根訳を作る。こんな言葉は今日初めて言った。こんな言葉は使ってはいけませんよ。使ってはいけませんけれども、そういうことです。

「斯くのごとく汝らも……」は、今度はいいですか、「我らも」ですよ、

「我らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者であります」

ということですよ。

¹²然れば罪を汝らの死ぬべき体に王たらしめて其の慾^{よく}に従うことなく、¹³汝らの肢体を罪に献げて不義の器となさず、反って死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献げよ。

ここに「罪の器」「義の器」とある。「罪の僕」「義の僕」と二つの言葉が出てくる。「罪の器」とはサタンの器ということ。「罪」というのは「サタン」、あるいは自我——「罪、罪」なんて言わなくなっちゃいい——サタンとか自我です。我執なんです。これが罪ですから。「罪」というと、何か具体的に「これとこれとこれが罪だ」なんて普通思うけれども。要するに、これは人格的なものなんだ、サタンにしろ、自我にしろ。

片一方はキリストだよ、「義」というのは。義人だから。「キリストの器」「キリストの僕」ということ。だから、パウロが

「自分はキリストの僕」

と、ロマ書が一番先に書いたでしょ。義の僕です。これはハッキリしている。

「神さまという陶造^{すえつく}りの器である」



と、エレミヤにも出ている。

●信即現

「神に献げよ」とある。「献身」という。献身なんていうことをわざわざ言わなかったって、本当にキリストについている、キリストのものということ。「キリスト者」というのは本当は素晴らしい言葉です。これ一つでもつて福音なんです、キリスト者という言葉一つで。

「私はキリストのものです。キリストと一つになっています」ということ。

「我を見し者はキリストを見しなり」

なんて、それは手放しには言えませんが、

「わが内なるキリストを見よ」

ということとは言えるわけです。キリストは手放しで仰った。

「我を見し者は父を見しなり。我と父とは一つなり」(ヨハネ10・30)

と。これは私は大好きな言葉です。たった三文字だよ、ギリシヤ語で。節で一番短い節があれなんです。おそらく、こんな簡単な節はどこにもない。

私たちはキリストと一つであります。そういった「合一」ということを言うと、すぐ「神秘主義」と言って警戒するクリスチャンが多い。神学者にしろ、無教会なんかはすぐそうだ。「キリストと自分たちは質的な隔りがある」なんて、バルトが最初にそんなことを言ったものだから。それは、旧き我はもちろん質的な隔りでしょう。けれども、新しき救われたる私たちはキリストと一つです。だから、パウロが

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と何回も言っているでしょ。

「われ汝らのうちに、汝らわがうちに」

と、キリストも仰っているではないですか。「イン・アインアンデル」(相互内在)の関係です。「われキリストのうちに、キリストわがうちに」ということが大事です。

信は現である。信即現ということ。まあね、皆さんはまだお若いから、それはしょうがないけれども、だんだんその境地を即刻捉むようになってくださいよ。どこであっても、電車の中であろうとどこであろうと、何か人と対応するときでも何でも、信即現がなつていく。祈りは直ちに自分を投げ入れること。そこからお願いする。投げ入れないで、お願いしてはダメですよ。

「南無キリスト!」

と、自分をキリストの中に祈り込ませたその境地で、楽にお願いしてください、そこから楽に。本願の角度が出てくるから。お願いしているうちに、全部それが現実になってしまう。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」



「祈ったことは聴かれているぞ。本質的には聴かれている。心配いらん。現象の面、結果の面なんかを問題にするな」

と。いつも現象や結果を問題にしていると、御利益信仰になる。地上で本当に満たされることなんてありませんよ。だから、天界をこの地界に、

「聖意の天になる如く、地にも成らせ給え」

とは、

「いや、お前たちの中に成っているぞ」

というのが本当の世界です。そうしたら、本当に

「御国をきたらせたまえ」

と祈れるんです。

●永遠の生命は既に来ている

¹⁵然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。

もう律法を超越してしまった。キリストは活ける律法なんだから。「すべし、すべからず」なんていう世界はもうなくなってしまうている。もちろん、相対的な我々は、「すべし、すべからず」なんていうことも考えますよ。けれども、そんなものは相対的な意味で考えているだけの話で、本質的にはそんなものはもう乗り越えてしまっている。だから、

「いつまでも小さい、小学にこだわるな」

とパウロが言っているでしょ。いわゆる哲学ではダメだと。

¹⁶なんじら知らぬか、己を献げて僕となりて、誰に従うとも其の僕たることを。

或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて

「従順」とは聖意にかなうこと。聖意を体して、聖意体現をやつて、

義にいたる。

¹⁷然れど神に感謝す、汝等のもと罪の僕なりしが、伝えられし教の範に心より従い、¹⁸罪より解放されて義の僕となりたり。

なんて書いてあると、「さて、『伝えられし教の範に心より従い』なんて、私は本当に心から従っているかな」と。こういう言葉に躓いてはいかん。パウロはこれを戒めで言っているんだから。そんなことをしたら、また新しい律法になってしまう。

¹⁹斯く人の事をかりて言うは、汝らの肉よわき故なり。なんじら旧その肢体をささげ、穢と不法との僕となりて不法に到りしごとく、今その肢体をささげ、

義の僕となりて潔に到れ。

「肢体をささげ」とは全存在を献げるということです。神の聖に入れと。

²⁰なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。



勝手だったわけですが、この場合の「自由」というのは。

²¹その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極は死なり。

死ではないか、滅びではないかと。天国と地獄のことを言っているわけだ。もう、非常にハッキリしているから、註解も何も要りはしない。

²²然れど今は罪より解放されて

十字架によって罪を贖われた。罪からの自由、自己からの自由ということ。これはマルチン・ルターが『クリスチャンの自由』で書いています。「罪からの自由」から、今度は積極的な「愛への自由」に変わるわけです。自由は何のためかということ、「人を愛するため」だということ。これが即ち僕の姿です。キリストの僕は人を愛する。「愛する」とは「助けること、救う」こと。敵をも担ってしまうこと。「敵を愛せよ」とはそういうことです。感情的に愛せよというのではない。敵をも担ってしまう。

贖罪によって、私たちは自我から解放されて、本当に人を助ける自由をいただいた。その自由は、人をなぜ助けることができるか。それは聖霊が来ているから。聖霊のない自由なんてものは自由ではない。

「御霊のあるところに自由あり」

とパウロがガラテヤ書で言ったとおりです。

解放されて神の僕となりたれば、

「キリストの僕」と同じこと。今までのサタンの僕から、神の僕となりたれば、
潔にいたる実を得たり、その極は永遠の生命なり。

「極は」と言うけれども、もう始めから永遠の生命です。そして、それは具体的に、最後に具体的な永遠の生命となる。信仰的現実として、永遠の生命は既に来ております。有機体的な、また矛盾構造におけるところの一番大事なものは、ハッキリと自分が現に持っている、なければダメですよ。

²³それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

「罪」というものを義人化して言っている。「罪の価は死なり」とは、そういうように僕になると、罪というやつが、サタンというやつが私たちに何をくれるかと思ったら、死をくれるというわけです。「ご褒美として死をくれる」というんだ。とんでもない話だ。

然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

「賜物」は「カリスマ」という言葉を使っている。「主キリスト・イエスにありて」は「エン・クリスト」ということ。永遠の生命がカリスマだという。言い換えると、キリストがカリスマだと言っている。キリストは「カリスマにしてカリスマ」なるものだ。キリストは「恩恵にして賜物」なるもの。まあ、いろんなことを言ったって、みんな連関しているんです。



そういう言葉というものは。分析するような概念ではない。

●聖霊のバプテスマ

これが、ローマ書6章の「バプテスマ」ということ。そこで、

「されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い^{せま}廻^{いかばかり}ること如何許ぞや」(ルカ12・50)

と、キリストがルカ伝で仰った。即ち、あれは十字架のことだった。これはキリストにとつては血のバプテスマだった。しかも、自分で自分の血の中に入ってしまうような。贖罪者です。贖罪のバプテスマをキリストは受けられたわけです。「わが受くべきバプテスマ」とは、ヨルダンの水ではない。水の潔めではない。「我々は血によつて潔められた」なんていう讃美歌があるでしょ。

「十字架の血に潔めぬれば、来よとの御声を我は聞けり」(51番)という。

もう一つ言いたいことがある。今度は、上から来る聖霊のバプテスマです。御霊のバプテスマ。これは洗礼のヨハネはちゃんと言ったんだ。

「私は水のバプテスマをするけれども、あの人は聖霊と火でバプテスマする方だ」

と。「聖霊、火の如く」と言うでしょ。「聖霊と火」というのは、聖霊も火も同じことです。別な言葉をただ並べただけの話です。即ち、ペンテコステでは火が臨んできた、「聖霊、火の如く」と。ヨハネ伝4章では、「聖霊、水の如く」とある。火とも水とも言うけれども。御霊のバプテスマにおいてはその二つのものがあるわけです。

血のバプテスマと、火の、聖霊の――火とか水とか――バプテスマです。私たちは「バプテスマ」と言うときに、十字架の死へとバプテスマされたが、今度は、御霊によつて生命へとバプテスマされる。ここではパウロは「聖霊」と言っていない。復活のことは言っているけれども。その復活の生命は即ち聖霊が持っているんですから。

それでローマ書6章の本当のバプテスマということの真意は、この画面を捉^{つか}まなかったらダメです。これが渾然^{こんぜん}として一つですよ、もちろん。渾然として一つ。だから、十字架と聖霊は離すことができない。パウロが言う復活とも離すことができない。「十字架・復活・聖霊」は離すことができない。甦^{よみがえり}えりの生命そのものが聖霊の力でもってあるんですから。パウロは論理的構造でもってものを言ってますけれども、それをいわゆる神学的なものとして「もし、こうであるなら」なんていうのではなくて、

「もう事実、お前たちはそうであるから。我々はこうであるから」

という読み方を、聞き方を、受けとり方をしていかなければ本当に読めないというわけがあります。

